古今和歌集

特別
6080

特
No. 422
1
門へ
號 6080
巻

文武天皇

古今和歌集巻第一

春哥上

あらとしに春たちける日よめる

在原元方

年乃内に春はきにけりひとせをそこにやいはむことしやいかん

春たちける日よめる

紀貫之

神ひちてむすひし水の加ゆるは春の風やとけん

題しらす

よみ人しらす

春霞たちやはしめしの山に雪はふりけり

二條乃きさきの春のはしめ乃ひとる

雪乃内に春は来にけり鶯のこほれる涙今やとけん

題しらす

よみ人しらす

梅かえにきゐるうくひす春はしるしなけれは雪はふりつ

雪の木にふりかゝれる

素性法師

春たちは花やみるらん白雪乃かゝれる枝にうくひすの鳴く

題しらす

よみ人しらす

ふりしきてそのてしおりけれは来しめの雪の花と見えん

ある人のいはくに深のおほいまうち来との哥也

大江千里

うらひすれ若しいけるなかなくに春の風をとるなれ志るしかな

在原棟梁　業平朝臣男

春たてと花もまはしはぬ山にはいもれうゝる所に鶯をなく

題しらす

讀人志らず

野へちかくいへゐしきれ鶯はなくなる風にしたがきしらく

かすゝ野にはふにはなやきそ若草はそはもこもらぬ我もあり

み山には松乃雪をかに春しなくに都は野へ人まれつゝ

春日野にはさふひのわりいてゝみ今合ひくかりてわかなしてん

梓弓なりて春雨ふりぬめすさへ春ハ若草まつとて無

仁和乃みかと見たにおはしける時に人々

まうなるまいけるかうに

君ゝこめ春の野にいてゝわかしつむ我衣手に雪はふりけり

哥をそ下つ連れ時をしてしそ

つまる

はるゆき

かすゝ野乃わかけしやゆ鳥の袖ありけて人の行を無

題しらす

在原行平朝臣

春のきる霞乃衣ぬきすゝ山をしたゝてゝらへらなれ

寛平御時きさいの宮の哥合によめる

源むすめゆきの朝臣

梅花立ちはなりしかれ人のとうしるまでもしるなり
むめの花をりてよめる

東三條の左のおほいまうち君
源常 嵯峨源氏 左大臣 左大将
斉衡元年薨 卅四

鶯の笠にぬふてる梅花折てかさしおいまくの御やの
題しらす

素性法師

よそにのみあはれとそみし梅花あるぬ夕のいおりてをりなり
梅花をりて人にしなりけり

忠也のり

君にすらて雖あらんとも梅花夕をも素性もしるへそ御
ゝ梅山にてよめる

はるゆき

梅花にはふ夏へはゝ梅山やみにこゆ遠をしるくそあり
月夜に梅花をりてと人のいひなれはおるそ
よめ御

見つ孫

月夜あはれとしたへて梅花素性にしてそしるへけり
春乃夜むめの花とよめる

夏の夜せんやはあやすし梅花色こそ夜なりけり人の家にしも
もそしを小雨うつることに屋をりけり人の家にしも
はしくやとしてはしくしてのちにいふまり望れは
かの家のあるしまくはしらにそむやとりはあり
をいひいあしてはなれはうこにしたり望御

古今和歌集巻第二

春哥下

題しらす　　よみ人しらす

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

僧正へんをうにおくりける

[illegible]

惟喬 文徳第一 母従五位上紀種子 右虎女 静

[illegible]

雲林院にてさくらの花のちりけるをみてよめる

そうくかうし　承均

[illegible]

さくらの花のちりけるをみてよめる

そうせい法し

[illegible]

うまんかんにてさくらの花をよめる

そうくほうし

[illegible]

とこそしよめる　三つ子

さもしへ物ゝなるにはなるとしたる花とまゝふいつ
やしいのほこもれいひ面のつりけるにあらぬ乃
花をとりて人をつゝける

なれいひの朝臣

如連つゝそ志野てありつゝ年れ内に春にいくゝ日あるとと思へる
亭子院乃帝会ましまるのはそれなる

みつね

今のこれ春にはれぬ時ゝまもらへとやとれ見れけ
かも

古今和歌集巻第三

夏帝

題しらず　よみ人しらす

我屋とも池の藤波さはまりし山部云ハ清かきなる無
こゝろうゝある人のいくゝうさのりと乃今ゝろ也
うそいきまさけるらしゝ　とこそしよめる

紀としらず

あいれて海にはあまるまやらしとや春まさしひとり
花しらぬ　よみ人しらず

さ月松山郭云しらはせき今もなる今無こそのゝ

古今和歌集巻第四

秋歌上

秋立日よめる

藤原敏行朝臣

明かたまたにすへきりしかそのはしに[illegible]焼風の
秋風乃吹ぬし日にはかへる乃あまれたるまたぬるなし
ひらるのあまれたるとしかれ志ならなはらかくて
天河りと絶とはしまと世やかれくつめ乃秋をしも絶
急ぬしあふ夜ハおもひあまれは務立まれあはすまあ
寛平四時なめりの夜こんまさねふ空のことも
哥をそまつ連花ハはしきし連けり時に人まかりて
よめり
ともの
あまの河あり世志て渡ことりつまれたるにあはそ
れなしかとしてさい乃宮の哥合のうた

藤原ハきさ世
ちさはは世ハそ沖未織女乃年ありとこいあふ
なめりの日れ夜よめり
九河内三つね
としことにあふとハ世れとられくる乃あり夜のみすそすな
なるまかしつるとの絶はへとしの世なく急やまとは
題しら源
うきい
おもひ元人の世ありしかれくれひらしきかとまさらもし
なめりのよれあり月にはよめ海
源しまゆきの朝臣

大江千里

月をはなちて水辺の人にかたる 第十 秋の夜 秋の孫也

しらくも乃月の桂を秋も秋の夜の月をよめる

月をよめる

在原元方

秋乃夜志月の光しあらはれ今ハ梅乃山を出しぬ今なり

人はりとり海ハ来りけるに秋をりくすの山をさ

けるを来てらめ海

藤原さきてふき

来りくすいくしなさそ秋の夜ハ秋なりしけりしハ秋そ海

是貞のみこの家の方合のうた

さしゆきの朝臣

秋の夜乃あくなりしらすなくしもつこと地やかけ

題しらす

あさつゆも色しけ如遠ハ来りくすの孫ぬとやらハかけ

秋乃夜ハ霧ようとまさしけし草むしとまむしの草

君志の草にやけるとふさ花ハ松虫の色そかけるけ

あさのゝ道も海とひぬ君のもしれ志するかにやとやる

秋の野に人をそ出れ志すなり秋とゆきそいさまふくん

もしれのちりてそゆけるけやとまるれしそつむしめらなる

ひらくしはなはつるなへに日ハくれぬとおもふに此はけにそ居はる
此ひらくしのすゝ山にしはしはなれ[illegible]はかりにしはしはなれ
[illegible]かりをよ[illegible]

在原元方

[illegible]人[illegible]なれ[illegible]なくこ[illegible]
是貞[illegible]家乃哥合[illegible]

[illegible]

秋風[illegible]

題しらず

[illegible]

[illegible]

春[illegible]

秋[illegible]

[illegible]

寛平御時[illegible]

藤原菅根朝臣

秋風[illegible]

[illegible]

[illegible]

あらはれはてゝ人のつゝけり
はるゆき
やとりせし人のこゝろにかゝらはる海のはるまとかれはるゝ
かゝらはるまとかめ家
うをい
ぬしたゝぬ事こそまはしは遠秋のまとかぬさゝ深しかゝ
はるそも
題しらす
平貞文
海とりハ海にあてゝ海にかゝ
ぬしたゝぬ紀かまいそ秋はしらす
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
ありはしのもしのやか

秋乃野の草のたもとの花薄はいてゝまゝ白く神と云
我のこゝやあらはれとおもひきりしすなくゆかけの道となてこ
素性法師
題しらす
しとしらす
かとりなるはしの草とそ春はみし焼ハ多くの紀にそ居
り草の花のいとゝく秋のこゝ思ふ人なりめそ
月草に衣はすらんあさつゆに遠てはらはろゝしぬ
仁和のみとかこにおしまたしけ時あるのきに
後をむしとそおしまたしけ道に遍照のはれ家
下しやとりこそ下りけ時に庭に秋のこ有

はくりておほしんもれかたりのそいてまちんて
うそてさしけり業徳

僧正遍昭

はとゝあまはてひとつかりあらやとなれや庭も海にはも
秋のうらなり

古今和歌集巻第五

秋歌下

是貞のみこ乃家れ哥合れけるに

文屋やすひく

明らかに秋乃草木れ志ほるまはしけるに山をしめしとふ
草も木も色かはれはつらしと乃渡の紀にて秋なりけり

秋乃歌合しける時によめる

紀ありしもち　淑望

もしれしまはれ山の風のかをとしや秋はすてしよりは
題しらす

よしそしらす

霧立て高きをのぼる岸屋は朝の原かすみしぬらん

神なび月時雨をいまはふるなるかぬのもみぢの神なび山はかすみしはをしらふ秋の

貞觀の御時後鍾殿のまへにむめのはなありけるを

あしたにまさせりける枝のはしはあまりけるとしのくれにさけりけるつそなり

よみ人しらず　藤原しらむ　勝臣

はるしらぬとはいはしこれはいつのころにか雨にうち降りしかぬ

いしの山にあらねどけふの時雨とともに山はもみぢしにけり

よみ人しらず

けふ

秋風乃吹にし日よりとなれる山之手乃植之女之味なり

山之手乃植之女之味なり

山之手乃植之女之味なり

しらぬ川乃支之手之なるといはんに秋のこれをちるとそ見

壬生忠岑

あきはぎ乃露とかつ〻とこぼるゝ涙乃袖之しらす

しらす

秋の露を玉とまとけ貫とすれ

人しらぬ

しらぬ山のこのしたのちるにはなるめ

しらぬ山乃けふしらぬ

けふ

秋務はいさゝなりそさは山乃はるそれなりしそれ　良雲

秋乃うゝそしよめり

坂上これのり

さか山乃はるそれ夜ハ人すれと梅ハ春なく良成はけるれ

人ゆゑせんさゝまきくにむしひつけてくける

うゝ

在原なりひらの朝臣

しゆゑ人も梅の時やうさむ花うちゝ林さへ物や

寛平御時きくの花をよませたまうける

とし申きれ朝臣

ひさかたの雲のうへそみるきくにあさそしめしとそあやまる

まける

これうゝハまゝ殿上ゆるされけりけり時まめしあ筆

おれしそそいうさつ遣るとなん

是貞のミこの乃家れ哥合のうた

きゝ乃ともなり

家なりおりてかさむ菊のはれ、世の秋のひけりなく

寛平御時ささゝの宮れ哥合れうゝ

大江子里

しゆゑ時花まちとなし有しきくうゝ秋まあひしゆゑ

おなし時をしまけ菊合ますしさをいけ

来くの花へなりけるまくはへなり深る哥

[illegible]

秋風乃ふさあけはらたる白菓ハ花かあらぬか渡のよすゝ

すゝけの月 延喜元年以後 贈位以前仍姓朝臣云々

仙宮なり菊とも菓て人ゆゑいたるかな 俄

よめる

如是てはいさ山地乃菓れ露のまゝハ曉ひとせと我ハ[illegible]

きくの花乃りとりて人のひとさてるゝと

よめる

[illegible]

花をはゝ人まつ時も白妙れ袖の花のまそあやまたれけり

おほはさはの池のうゝまきくうへてるとよめ歟

いとも花を思し花とおほはさは乃池の座をもとらんうへ

世中乃はゝなきこと俄思けるなりてりこれ

花を見てしらし菓る

はゝ仲さ

秋乃菊まはしかさりかたけれ花をりさ花をしらぬ

志らきくの花とよめる

元河内三ヶ

いあてはおもしかしもしらしの花をしらせる白菓の

山連はゝのみさ乃家れ奇合れうゝ

見人しら寄

色かはる秋の菊とはいひとくせにあらはれ菊とうたれ
仁和寺に来しの菊めしける時にうたへる
そそてまつれとおほせられしとてよそ
まゐりける　平貞文

秋をきそ時とうたれ菊の菊とつくるに色にはさまれ
人乃家なりける筆にもとうたしうへるりける
ほよめ海　つゆき

さはそめしやうしかれ来しの菊をさくるにはかれ
題しらず　よみ人しらす

ほほ山乃はしそれ紅葉なりめへとうさへみちとてるす　洲

宮ほうへひけしうそいうまいて山けとりこ
りり侍けるまよめ海　藤原開雄

奥山乃ハもかはれ紅葉なりめへてるりの光ゆる時なりて
題しらす　よみ人しらす

龍田河紅葉ミてれて流れり渡らハ錦中やそしなし
この帝ハある人なるに文武天皇の御哥也とかしまし
さらる川の紅葉なり海神めしのミしろの山に時雨あるに
又さかすり川の紅葉なり海　此帝末注人丸哥　他本又同
五しくハ見てる志のいしもの紅葉ハ以ちしそ山かへしのかせ

古今和歌集巻第六

冬哥

題しらず　讀人しらず

龍田河錦とりかく神祇月時雨乃ぬぬ[illegible]

冬のうたとてよめる

源宗于朝臣

山さとは冬そさひしはさりける人の見草もかれぬと思へ

題しらず　よみしらず

[illegible]

[illegible]

今しりはつまそ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬乃うたとてよめる

紀貫之

雷[illegible]

[illegible]

紀[illegible]

白雪乃所もわかすふりしけは巌にもさく花とこそ見れ

ならの京にまかれりける時にやとれりける所にて
よめる　坂上是則

みよしのの山の白雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　ふちはらのおきかせ

浦ちかくふりくる雪は白浪の末の松山こすかとそ見る

壬生忠岑

みよしのの山の白雪ふみわけて入にし人のおとつれもせぬ

白雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひきゆらん

雪乃ふりけるを見てよめる　凡河内みつね

雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思ひきゆらん

雪のふりけるをよめる　きよはらのふかやふ

冬なから空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらん

雪の木にふりかゝれりけるをよめる　つらゆき

冬こもり思ひかけぬを木のまより花と見るまて雪そふりける

やまとのくにゝまかれりける時に雪のふりけるを見て

てよめる　　坂上これのり

朝ほらけ有明の月とみるまてによしのゝさとにふれる白雪

題しらす　　よみ人しらす

消ぬかうへに又もふりしけ春霞たちなはみ雪まれにこそみめ

梅の花それとも見えす久方のあまきる雪のなへてふれゝは

この歌はある人のいはく柿本の人まろか歌也

むめの花に雪のふれるをよめる

小野たかむらの朝臣

花の色は雪にましりて見えすともかをたにゝほへ人のしるへく

雪のうちの梅の花をよめる

きのつらゆき

梅の香のふりおける雪にまかひせはたれかことことわきておらまし

ゆきのふりけるをみてよめる

紀とものり

雪ふれは木ことに花そさきにけるいつれを梅とわきておらまし

ものへまかりける人をまちてしはすのつこもりに

よめる　　みつね

わかまたぬとしはきぬれと冬草のかれにし人はおとつれもせす

としのはてによめる

在原もとかた

古今和歌集巻第八

離別哥

題しらす　　在原行平朝臣

立つれいなも乃山れ三稱まゝ松とし未たは今かへりさん

よみしらす

すゝかいく秋乃ゆ江原あさらてよひ人にはとゝまる

かきりなき雲井ハそ小わ海とも人にはなとゝさむ

なれてちふるゝ人らハくれ山ハ海かりける時

まけのよめる

さらちまれ山やれ海かりとあひちふるハけりハせきなとゝめそ

けるとは乃みこの家まそあらけれきら海か

あふ三れすけ海かりける時なりむまのけかむ

深しけり東よめる

きゝ乃としける

かふ乃れ山すハあふ三とハ松へとも秋やあけれ山霧けさ

むし海かりける人にとてけりけるける

かゝる山君とはきけと春みすと立つれなは悲しかるや

人乃むすれかれむけまそよめ海

きゝ乃はしめ

おしむとも悲しき物ハ白雲乃立なむいらハなかれ山を登

まてしのゝ急やまとしむ白山乃雪こゝろへてもあらぬ我身を
たとへは乃山のほとりまて人をまつらとそよめる

はる沖者

とゝは山本あらくなきて時鳥急ゝ別をおしむ也
藤原のちかけかたもおつひまなる月のきに
りかゝるにすゝりけるまゝ風れなきことも
さけしようにけるつゝそおもあり

藤原のまもり　慈哉　延長元年奉議

主語ともになきてこゝめら者りて秋の別をおしくやおもふ

平りとのり　元観　花人　右衛門尉

秋霧乃まよはらいてわかしなはほ連ぬすりひま急やわたん
源乃さねきて〈ゆめ〉をんそ海にはける時より
山さしまそまとしおしんける所そよめる

志ろめ

命にいにかなふ事なるにはなまゝわかれ乃かなしかるまて
山さしより神なりのりまてなるりに人々
海りてかなりそおもしてわかしおしけるに
よめる

源さね　左近少将實

人やりに道なるにしくにおほしにはいさこしといひて、いさかな
今は出連しりかなりまとさねかいひけるおもりに

よそけり

藤原ゆきもち

たちはなしを来れしに八月身にあはしかたりけるに道也

藤原乃ちかしをもとむしけしのすけにかたりけるに

時にあをくりにあふらしとこゆとそとを深草

いとゆき

かしはえて口なしゆく相坂に人多はあれ君をこそ居

おしはえ乃ちふるかとしへ海をわけるむかしの

もしむ事なり よめる

藤原ゆきもち

見ゆくこしはたちは山たちは孫とも雪はかにて流はんとん

人乃花山に海うてきそゆふさりくるかたり

なしをしけり時によめる

僧正遍昭

ゆふ人孫乃海にはたる山をみてあるむかしの山をしたりとなく

山に入りてかたり海うて来てみてあるはしけれ

いそによめる

幽仙法し

わかしは山乃ふるに海をそんとめしとめしに花はかにて

雲林院のみ乃舎利舎に山に入りてかたり

けるにふるの花はりとしてよめる

僧正へんを望

山ノ海ニさくらふさ海ニ見ゆ　[illegible]

幽仙法師

[illegible]

仁和ニみかとみこまかりてまつりけるに時ニ[illegible]

御詠しにまいりて海にてくりかへしけるに

よめる

慈藝法師

[illegible]

かむなりの山のほとりにまつりける日おほしめさせ[illegible]

へて海にてうちかれて[illegible]

いてけるなりにちの月をとりて

津ゆき

秋ニ[illegible]

北よめる[illegible]

慈覺王

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みつ[illegible]

[illegible]

題しらず

[illegible]

古今和歌集巻第九

羇旅哥

[illegible]

安倍仲麿

[illegible]

山[illegible]春[illegible]

[illegible]

ミつね

[illegible]

つゝゆき

[illegible]

ミつ孫

[illegible]

物名

素性法師

文屋やすひて

いらるめは時につけてそ日ハへぬるいもまほハ人にそしまし
なし　なつめ　くるみ

兵東　そこにきかりとは侍ける

わちさなしかなしなつめそこしにしとにかあいくるまにはそ
かくさとハ梅所まそ春にはちけるはよめる　夏物ろ

安信清行朝臣

渡ゆとそ乃望ゆるさとは来ゆるハ美にしるへやあらなはるん
いかゝにさ　かすこれおほしさこ

かちまれ雨なこれしつゝ玉なれいかさしちる花とみさらむ
あかのつまこ　阿保經覧

あらしに来

来乃ゆるにハいかゝにさいはちかゝむ渡らハ鈴良のうらはり分り

伊勢

なこれ花に秋かくさしてちらくあり水に春とハ風やすらん

かこやな

貫之

うもしさ雨乃ほらくゆるやかはるん鏡のけはまあるさ雪
らにかハ

わしにしき乃山邊にとれ白雲にいるまちとけるに時なき
かくの　さらこれ

夏草にしへ志けしるかす水のはくかくなしまるいかな
くるのこや　源かとこす　忠

秋くれは月のいろはやもすゑひとを花とちるすゑりを

百和香　よみ人しらず

花とよまれすちらし、風なきはいくそはくまつとかは思

すゑなし　志けも御

春くすゑかしかひちなりをは秋くるりはかしらはちり

なき大　とやこれらしり　都良香

なかしつかくにかてぬ渡河お来ひん時やそこは志らまん

ちまひ　大江千里

四ほひ乃なくれてなるなへ今まれあくまいなるぬらはとそ寄く

はとりあ御とそしてすゑめとうまて時せむ

まるよめれ人のいひけれよ見けり

僧正　聖寶

よしのなりめよあくやとそまけゆ来ハいそともにちり

めくらなる

古今和歌集巻第十一

戀哥一

題しらず

讀人しらず

[illegible]

意性法師

[illegible]

紀貫之

[illegible]

藤原勝臣

白浪に[illegible]

在原[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右近乃[illegible]

[illegible]

左原[illegible]

[illegible]

いはそと思ひしらすかの孫と秋乃中にあ風しかり望を
秋乃田にかりにこう人を遣けるなりにかりにしたを登
め夫れ事乃はいはへとてゝ頃なつきに光のまゝを我やますゝ
人ありる我にはあやな紀薄なりしはいてゝ思すしをあらん
おもし宮に事まいはかしてよくしつゝ物かしの志は来ぬ
おゝ山のすゝの孫に来ある宮に望ぬとゝいはん思に志は来
なり

古今和歌集巻第十二

戀歌二

題しらす

小野小町

思ひ出ぬ道もあやへにけれは夜と志りをはさめけるまゝ
うゝ孫を思ひ人をそしらに夢てゝ飛ばれをそめて来
いはをめてこいしは時にもとゝ夜かへてそしき事

素性法師

秋風に身をしむかれつ道を命をそしられむくるゝ夜とは
志りけいつとてゝ人のはにしける日吉をい法師
せゝ事うしまそいつりけるとしとゝ小程

小町のりかつ世りけり

あ面乃きよゆきれ朝臣

けぬ北と神なたまふ白玉の人とゝぬめれなこそなりけり

也し

おまち

なつかなる源そ神なす玉ハなす我ハをしらしめへとしつをなれも

寛平御時きさい乃宮の帝合れけるに

藤原敏行朝臣

恋まひくらぬるなかゆきからふ夏ハ夜ハ此ハつなるすん

すゝれ乃雀まふる渡らさへや長乃からひちへめくらん

なのりし来

我恋ハミ山かくれの草なまやしけさ雨さへ知人のなき

紀友則

東野れまとけりけく分ゆる夏出ハ雨とひさしくる恋とけり

ゆふされ螢しの洋ハ物ハ遠とも光ミしまやへのつしなき

ひらのれまくしとしのしらぬ蔵衣をそらえ雨さり

ひかやとの菓れ於孫なくしとの我えかりてそ恋しかりけり

川のをまひて玉とのみかしれく人をしまぬ恋ともしらかね

こふれたまこれ

かくしあるの君れ志しまきえて物思ふ事もしれ

藤原おきかせ

五月山梢とあかれて来ぬ孫宮守る志と可知

兀河内みつ孫

秋霧乃はるゝ時雲来はまかれ紫宮ゆしなくなり

清原あかや梅

玉ぬきをはしたる孫とも滅ぬ三ゝ志をなる孫達

山達はるゝみ此家の帝合のうに

ゝ三ゝ志ゝ守

秋ゝ達ハ山としまして鳴鹿ハ我ゝ也やひとりぬる秋ハ

題之ゝ可

清ゝ山者

あ我ぬ所ハ人ゝ我さけるゝ花の色ぬ也くさゝ物ハ思ふ人ゝ

みつ子

ひとりして物と思ふ秋の田ハ我ハ生ぬ花ハ梅ハ生ぬ

あかやふ

人と思ハもかりあり孫とも雲井ハ三ゝ生ゝ来ゝ

たまゝ三子

秋ゝ霧ハ我ゝ生ゝ可ゝ志ゝ人ゝ思ふ人ゝ

つゝ山さ

海ゝ之ゝ海ゝ花の山ハ水海ゝ達ハつ子ゝ也ゝ

や海ゝ之ゝ物ゝ有ゝ人ゝ可ゝ清ゝ

山ゝ也ゝ山乃さゝ花人つそ三ゝ来ゝ

戀歌三

あさぬ[illegible]袖にしほしめ源河身さへなる北斎[illegible]

題しらす

よろしらす

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こ乃音ハあるへ[illegible]

秋[illegible]

小野小町

[illegible]

源宗于朝臣

[illegible]

晨明乃[illegible]

逢事[illegible]

[illegible]

秋乃来る若のミなりかりあるとハ事そとも多くあけ
ぬる物を
九河内躬恒
あらしも思そとそ者しかりあふ人ハ秋の来るしも
よミ人しらす
志のぬれはしらくに秋の来ゆけハなのうきぬるなりそかし
藤原ゝまつ孫の朝臣
あ津ぬとそ合もれハ津くらゝまとゝひ志ゝ思ふ
寛平御時きさいの宮の哥合のしに
としゆきの朝臣
何津ぬとそ知る道ハこれ恋ハ雨と濃とかそしら
題志ゝ詠
寵一統ウツノ
一統チヨウ 用ニ
志乃ぬれ口ゝ知しこ我そまに馬ハ見ゆ業はしめつる
よ見そしらす
郭公爰ゝ名ゝ物さつ物れ知ゝ見ゆ月ハ志ゝ志
玉匣あ津ハ志ゝ若し此あへ秋ゝ名ゝ人ハ津ん
大江千里
はこゝし之様津ハ今ハ之志ゝ見ゆ思ハつるそきしてかしさ
いとよあいしてあしさまよこしてつゝしける
なりいしの朝臣
孫ぬる秋乃爰ハいなミ雨とゝ思ハ思ハ知ゆるなかと感ゆるし

[illegible]

平貞文

白川乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

平貞文

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

伊勢

[illegible]

古今和歌集巻第十四

戀歌四

題しらず

讀人しらず

[illegible]

[illegible]

梓弓[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原敏行朝臣乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

在原業平朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

堀江こくたなゝしを舟こきかへりおなし人にや恋わたりなん

伊勢

わたつみとあれにし床を今更にはらはゝ袖やあはとうきなん

つらゆき

いにしへになを立かへる心かな恋しきことに物わすれせて

人をしのひにあひしりてあひかたくありけれは
その家のあたりをまかりありきけるおりにかりの
なくをきゝてよみてつかはしける

大伴のくろぬし

思ひ出て恋しき時ははつかりのなきてわたると人しるらめや

右のおほいまうちきみすまさりけれはかの昔おこせたりける文ともをとりあつめてかへすとてよみける

典侍藤原よるかの朝臣

たのめこし事のは今はかへしてん我身ふるれはをき所なし

返し

近院の右のおほいまうちきみ　能有 文徳源氏 右大臣 左大将

今はとてかへす事のはひろひをきておのか物からかたみとやみん

題しらす

よるかの朝臣

玉桙の道はつねにもまとはなん人をとふとも我かとおもはむ

みちしらせ

かゝ見ゝう合はあるを此道にかゝはりて時をあらはす物を

古今和歌集巻第十五

戀哥五

五條乃きさいのつらせあらはるゝ人
まほしいはあらしを物いひはりけるとむ月せ
ことはあまりにせんほへかなしまるあり所は来
かれにえもあらしいはそ又乃さしの春むめせ
花さりに月乃かりしらはけるまうと恵
てゝ乃あらはるゝいはそ月乃かゝふくまそあら
なるゝ為しはまをりそよめる

左原なりひらの朝臣

月やあらぬ春や昔の春なれど身はもとの身にして

題しらず　藤原なりしの朝臣　仲平

花をしたれば誠とうしるかなしかりけり

藤原もすけの朝臣

よそにのみ春の海にしたれば花のなかれ

九河内三つ孫

我をとて誠とおもひ人をしたれば世を語る世

立花なる

久かたの乃あまりに雪かとすすかなくに人をしたれば思ひなり

よそにしらす

見てを又まちをみまくのかしたれば今をしたれば人にしたれば

きのりの

雲をなるなさしらあさしたれば我なりやいとかれのみまとにあらん

よそにしらす

花をみなる海人のあまりにあれば人をすまあらんかすなる

しほめけるあひしてなる海にしたれば人にしたれば

伊勢

あひまあひして物思ひ人の我雅に屋とる月さへあるこほ有

よそ人しらす

秋なりしをしたる夜ハ孫あすりのあまくしたれば

すまれぬ事乃志ほ屋ほ衣おほいとあつきとまあれや若きまつ
山志語乃ほ花のまつこもかりまつにぬ人ゝのむ我そけり家
あひ言ひハ憲ゝ海ゝ松ゝ高ゝ河なれ多ゝ あるめて思そめ久ん
晦れ来のほしかほしいかほ若かこぬ衣ハ我そうすかく
玉かつ合ハふゆとや吹風ぬとあ又人ゝ思ふ来てしまらん
ワ神まきほ時雨のふりぬりハ元かハ秋や来ぬ無
山乃井ぬあさほハ又まハぬとう来けりのミ人の言ん
忌草ゝ孫とうまつとあふとれハとかくうほ物と志りせハ
こふ連と又あふよのなほハ忌草ゆめちまさへやあひ志けるん
夜まとかあ梅とかく成ゆく我やハ孫ぬ人やまみまと

寄むかハ法し

り語こと夜ゝみてほちりきまぬ中そけりけり
ひきりのミなかめ小海やのつまなほ人と悪乃草そおひ久ら
ひるけれか海 備中守 貞弼 登 仁明字

備正へんをう

ワやとほ道と女来まてあまほ人と縁とをしまふ
合さんといひてまうれしまとしかひらしの孫とおもそなく
うこ人しら寄

こゝめやとほ思物ひいくしけなく中ふくれ立ほ連て
海しまれまひ物とほうかの衣まかり我とそれむる

伊勢

常康親王
仁明皇子

雲林院にて

つまし味成合ハ出ひしと思ひ候ハ中ゆる源ニ

題しらす　いせ

ひとしきすゑし萬しらはひつ也なれ君うとゑにいもせ

しらしらに思ふ出ひ我屋と今来とないひそ人の来かくに

あふ出とあもしらゑし時ハ人志急しとも出りなし

まひしかる時人もあらんに来ハいけに成志のふ源ゆるらん

藤原おほ人

怨て也なれてもいもしかるそ也き鏡にまゐるひなくしてて

しらしらに

ゆふされ人なれとこと出けしひなまゐしゑめと出るのあ

まゐしいとあまりあれ出なと立かりあれ出ゑて海こゝろし

あるに田成あらすれ出ゑしても人志いけそしらやすめ

君そうとれけすの海ことゑめしのすゑ出ゆ

あし遠しに宝井とけて出くれ出やさ成ける成身ゆ也

志られつりあらけるに也ゑ出ゆ乃ハ山の秋にあふそまひしれ

秋風乃あれと以ゆるむけし野ハなへて草葉のなかりなり

小町

炎せにあふゑのこゝろ出ゆ成身むなしく成ぬと思へる

平貞文

古今和歌集巻第十六

哀傷哥

いかりとれ身海ゝ中にはいる時とをけり

小野乃ちもちの朝臣

なく滅雨と書ゝ女をゝ河名海さゝ女ハかへりくるゝ小

さ比のおしさ（忠仁公）ハいまうち末を正志ゝ川の者ゝ

てりなくりける東よめ海

延喜ゝ比太政大臣只二人也

仍洛不辞官人前ト云也

前始ゝ也也

うきゝ詩ゝ

ちれなくゝおしてそ毎末そ白河ハ恵ゝ代まそ四名ゝ

ほり川のれかきおしハいまうち末を身海ゝり可

けり時ゝ書ゝくにゝ乃山ゝおさめてけりのちにゝ見

業海

儒都勝延

昭宣公 寛平三年二月薨 太政大臣 関白始

空蟬ハかゝしゝ見つゝ女ゝさめそ深草の山煙ゝ小さそ

かむつ家れ三子お 岑雄

深草れ雅へ世ゝさゝらしゝあゝ

あ比はゝのとしゆきの朝臣志ゝ方海ゝりゝ家ゝ

時ゝしとてゝれ家ゝつゝけり

きのとものゝ

孫てゝ言ねてゝ人ゝりおしゝ

めいしまりける人世ゝ身海ゝりゝ名れもよめり

世にも海にすむ也ひえ乃山にのぼりてかくら
おろしてなりたれ又乃とし三山人にあくぬ来
てあるハかう事にハなかりなとよろしひなる
と来ゝ今 紀ゝ家

儒正遍昭　藏人頭右近少将良岑宗貞

此人も紀乃家にまなれぬ也此家にかれ身海にて乃秋かれ家に
河原にはしいまうち来ゝ此身海にて乃秋かれ家に
ほとりと海にはけるにしまうち来ゝ此に文まゝあらくも
（嵯峨源氏融　寛平七年八月廿五日薨　七十三）
なるさりけるとゝてかゝ家にまゝとてゝ出るりける
（寛平七年于時大納言左大将民ゝ人皇太子傅）
近院の右におしまうち来ゝ
能有　文徳源氏

此つ家にさしいしくもあるかもしれも此家にハ文なり
あらはしにあつ孫の朝臣ゝ身海にりてれ又乃
とし乃夏ほと来ゝ此なれけるとまゝてよめる
津ゝ中来

那ひはさなくゝ志におとろけれ君にはかれ時にそありける
さらぬ此ゝ風くあり家海に屋うやく紀ゝこ
ぬへき時にかゝ人へける人身海にりにかれ
ちれ紀ゝ見てよめる
きのりゝ此ゝ中き　茂行

紀より文人にちあるにまなりしかれいつ出ゝ此ゝ此にこひんとす

題しらず

藤原忠帰

寂と年とおくなる物と思深人まつ身を菓にはなれなりと
やまひしてよはくなりまゝる時よめる

なりひらの朝臣

此料に御く道とかはして青くしかれ明るなるとは思はれしは
かひのくにかわひ志りて侍ける人をふるゝんとて
海かりけるとみちまうまてあれかにやまひなし
ていさゝ北なりまゝれしとて家にもて
海にそはてしり見をかれいひて人
につ菓もかりけるに

在原忠けれ家

かりそめれ御きうひちとそ思こし今ハ有り世を
かれてなり

古今和歌集巻第十七
雑歌上

二條院讃岐

あ寄てみ達ハ此とつ寄てありけるうに
老ぬ達ハ行ぬ口ゐれありと云へ寄ハいなくみまくかし此志かれ
返し　業平朝臣
世中ハ行ぬ事ハ何なくもかれちよとも寄くへ思これなめ
寛平御時きさいの宮ハ帝合のうた
ありけれむすやれ
白雪乃や面ありしけるかの山へ寄くも老よけるかれ
おなし御時乃うた面れさふくひてをのことも
まおほみ来ぬまいておほみあうひありけるに
けいそ小津うすけ遠
とし　ゆきの朝臣
老ぬとそなるつ身ハ世ぬ此年んおいそハふるあれまれ
題志くす　まとゝしら浪
ひけやふる此れしもなれしそあれとハ思年ハ面ぬ達ハ
我みてもひけしくなりぬすきのえ来れひめ松いくよへぬらん
伯吉乃宮のひめ松人なるハいくよかへしきハまれ此
梓弓いそへ乃小松ゐかよかりよかりよかれてまれ此ん
こ乃帝ハある人のいくかさのりと此人まろ也
まくしけよとやけくさむあれけれおのへまたる松なる時
藤原お此ゐせ

毎日の毎日の事成ハ御学ニ若ハ如ハ物ニ見ける

一本ニ来ルトモ

法置にしかはれてまゐらはけるすなり

たてハ北ハ海ニ北ニ毎ハ此ニ来せ毎ニ

ハ学海

おしらしハ此ニ海ニ入ハ成ハ世にはきて知ハ浪ニ

中務ハ今ニハ家ハ池ニ舟ニ行ハ知ておろし

はしめてあらハ日法官ハ読ハ知れし

まゐらはり御ハ知ハ入りおりし海ニ無

としけるおりまゐてこそ津りける

伊勢

水乃入ハ海ニ舟ハ若ハ知ハ知ハ此ハ物ニ

かゝ知ハ海所ニ来よめる

其ニハ法し

宮こまそ日此ハ海ニ入ハ浪ハ丁寧て風そ心来

ぬハ心きハ入ニ来よめる

在原行平朝臣

おきちゝ浪ハ白玉ハ石玉ニ来ハ此時ハ海ニ

布引乃ハ此ハ北ニ人ハ知ハ此ニ来ハ

みける時ニ見よめる

みつね

風雲と所にしたがふ白雲ハ此ハてあつる水にそ見ける

田もしら乃山と此ハ女はうのこふらひにて御

屏風の忘山詠んでけるに為此ハ此ハ常家

とあつおりしろしあ遠を顯にてうたよめ此

さふら姫人におほせられしよめる

三條の町　惟喬の々この母

思をくいれしらの山に此なれやおそはしたれとをとれ来てね

屏風の忘なる一紀をよめる

けらゆ来

さしそめし時よりの此ハしらいへて世ハ春なまや色のつ孫なる

屏風の忘によみめいをてしけり

坂上これのり

かりてほと山ゑれ孫の此ハしらいへなれしようにしれ秋の

う常れし

古今和歌集巻第十八

雑歌下

題しらず

讀人しらず

山乃法しの事をへつりしける

九河内三つ

世にそ山に流人山にそ見れば時もいまらゆくらん

物思ふる時ハとは今きこゆそよある

今更に為にあひ行のこれは事しけれよとハ

題しらず　　しらず

世に事ハ事れば志ふれ行のこれは常そなく

来あるあらぬ事にあらぬ行のこれは我身なりぬる也

ある人のいくらかの三ヶ所也　高津内親王　桓武女

わ身ならうき世にとなりけつて人をなめさへ行しかるらん

たまのくらにあるさしれて侍ける時によめる

さらむしの朝臣

思ふやうしのこれにたくへてあまれ侍ハ此ハ毎とハ

田しらの川とはよめるあらはてはのくに此海

と海所なり侍けるなり文れしらに

侍ふる人にはかりて家隊

在原行平朝臣

こそくに小河人あらはすまれ浦にもしほ多しつて海とさへよ

左近将監にして侍ける時に女れにつかひ

なをしきに家る也事にしてつかひける

かきくらしけるを世 寛平二年 紀右少将

ぬきくらしけるを思ひとて今思我が人の忘身とあるよし

ほかにとけて侍ける時よめる

平貞文

こ海まいかとさせりともみなくかなとの我身のいてそにしる

ありもそぬ命さそはの間はかりうきをもしくおもすもし

みこの宮乃ふ此の御に侍けるを交ほ人にかう

下ほうすとそとけく侍ける時よめる

こやち乃きこ此 清樹

ほくも孫せこ此の此をとる立そとる春れ三山のけを忘て

時なりける人せいにほかに時なくなりてなく

みて方ほうれなく此をなくとうこしもなしを

此思てよめる

清原あるや梅

いかに方末谷にいまもとそなれさ此てとくちる物思をなし

かつらに侍ける時に七菜乃中宮のとも世あるを

へりける四処事にはそもつ出りける

伊勢

久方此なるにおしけるにとなれ元此の三そ毎の聖ってなる

末此をしにたるあれの下けに海かけ時にむま

乃ちれし筆を聖とて久しといひをくれりける

家にて

伊勢

あすか川あれにあらぬ屋と世にかはりゆく物にありけり
津ぐしに絶け時に海かりかひつこ来れ深る
人のまに京にかつりまうて来えけるけり

きのとしのり

あるはとゝみしかとあるはかへしかたちにかへて忘るけり
女とも此と物かたりしてまうれしの此にけるて
深淵

みちのく　梅くすなかな女

あらはりし神のなりにやはまに深人まうあまりしのなり此にあり

寛平御時にも詠むしのはう官にめされて絶
けり時に東宮のさふらひにそなのことをさけ
毎うへけるそいそにとゝ絶けり

あれはけのこゝふき

あるけの根なりけり風にもつたるの様なれて物にはしれ

題しらす

よこ人しらず

風あれは葉そしたる渡らん山根もしやまうひとりこゝあん
ある人こゝろうたは昔大和の國なりける人也
むすめにある人をみまりけれこの女おやとな
くなりて家をまるくなりゆくあひたり

古今和歌集巻第十九

雑躰

短哥

題しらず

讀人しらず

すべきれ　おほせかこみ　まほしく乃　なりまほしくすと
いをのうとのうれ　思ほしうれ　りろいあめ　とりとすれ
玉乃と乃　みしれ　思めへと　粗めなす乃
年とへて　大宮ほのミ　ひ泊るれ　ひ泊るす
ほうふとて　かりみとぬ　わり屋と也　志の草なる
いあすめ　あり春雨の　りりや志めらん
ありうたはくへて　まそすほ　ほるなりうた

壬生忠谷

くれ行也　よれあり也　なりきは　いかのあす也
いまして　思ふ所と　のよへまし　ありれもしへ

あり方ちあ　人まつらは　うましけ也　身ハ志となる
まとのもと　あまそ宮まそ　寄そしあ栄　すきれなまそれ
あとなし　いまもまれ　くまるる　ちりまそ栄とや
ちりなし　ほめる事と　とはるる無　あまほしなりへて
栄ほまれ　雲まほしん　ひしして　ちれなさけと
おほしと　りとのいそ　かしらしれ　かくハあまとも
てりりは　ちりれ雨りれ　身なりしと　あれハ秋の
くなるる　あさじ寄いて　みれなり　とれへりる月れ
みなとなり　おさしくも　おほしと　あのかさ也
なりまそハ　あしれ世も　寄りしなき　今ハの山し

七曜の末さ紀こせ　延喜七年六月八日　崩　卅六

伊勢

[illegible]

旋頭哥

題しらず

[illegible]

題しらす

[illegible]

君かさすみかはの山のりこれも乃色神しかな月
むくれ道の雨ゆゑそめの雨なりけり
誹諧歌
題しらす　よみ人しらす
梅のはなしかなにうす雪つゝ道覚れひとくれにいとひしとなり
うさいは法師
山吹乃花ゆゑ夜ありしやあれさへ花さへ色なりあらて
藤原さしいまさの朝臣
いくはくの田をつくれはか時多しそのうさはあさのしらふ
七月六日なれはこのいなをとゝけり

藤原ノ孫すけの朝臣
いまゝかれまるくいはれはれはあけてあすれはつゝ
題しらす　凡河内躬恒
むそしをもまるつさしくまあけぬやり、いまゝは秋のなりしふ
僧正遍昭
秋の雨ゆゑ年ゆゑしたるなとゝ見せあれしかなし雨し花はひと
とゝ人しらぬ　時
わきくれは野へまゐはるなとゝ見せ、いつ道れ人のつさしてうへ
海藤乃はれてなれは女郎花のしはするそんなれ
花とゝそおもんとすれはなとゝ見へしうゐあり浦の老まこう

寛平御時秋さいの宮の歌合のうた

在原しの孫やす

梅風にほひつゝあるしあるしは梅はなりませて梅こうらに
あす春あるむとしけり日となりの家のうゑ
しは風の雪をあはこしけるとこそうれとなり
へらみてはうしけり

清原あり屋梅

冬ふかう春はとすれはちかはなくはれはそ花はちりけり

題しらす

しん人しらす

礒の神なりにし忘れうきさいてあるに我はいつ孫をする

枕しは詠しは忘れはせめらはれはをむしるなきそしとしなりにしき
忘しき者かなるとしるこうなき者はあるはなしはなしは
ありあるやといきかたるめいきかいはあるはあるはしまそそ
みなしは乃山はしはなしえそしは思はなしはそあるはを無
あしいき者はしはなしはしはへ我おはしとはあるはしはしき
きのめはは

あしは孫乃なしは思はあしはあえ神しは深るはしあしは煙
きのあるとも

あいはなまくはしはなすなくありはしは人は月なき海とはしはしすれ
なれこまは

思浮しく人をそこまとはまゝ海さしやむしてはなりけり

一本あるや海

一本にこと人をしらぬ

いてゆかむ人をとゝめんらし業にさすれはかくまゝ

紅にそめしいとゝ海はまはれ人をあくまいうけるふなり

いとはるゝ我身は妻はこ海にまゝ狂ひしてはしらせて

驚れしうの屋にりのふるとゝや我にしい人のつまなるらん

はしの我に暑い人をしらしのれはやく家衆はしらしめり

平中興

あふことゝ乃はしはしるゝに成物迷ハ和ふる所ハ月なりけり

左のおほいまうちきを

も詠てはしらしの山にまゝるとゝまとゝ迷へ思我なるなるに

なるに

雲もはしめしはしの山乃あさ海しや人のはしみてこゝやさめ

伊勢

なるはなるなるはしはしをいしらせ今は我身はなるにんとゝ

しこと人をしらぬ

海めなれとなるにそはなるかるゝやのこゝにしてあれとあしかるゝ

おきかせ

なるにそはなるに立とはれしらんしりて海とふは我はしりかは

古今和歌集巻第二十

大哥所御歌

おほなかひのうた

あまくもの年れ始まりてこうちとせぬれてなくさ　とつめ

日本紀にいつへとつめよりつよまそに

あるはやまともいのうた

志りにゆふかけしき山にあるゆゑ時なくなりはゆるし

あふこあり

あねこしはあはれ此ぬのかにしそなくなるあけぬ　このよれ

こけしくはあり

水くはしのなかれ屋るまいりとあまたに祿てれあさけのしきとあり　ありはも

志もしけ山ふり

志はつ山ゆゑいてこれなかゆひれ嶋こはかゆゑなしなく　なくす

禪あるひのうた

さりものうた

禪ゆゑはしこむ山れらはして禪のみまへすしけりあひは　なり

志もやうひなけれ此ゆゑはしこ木れ此ゆゑは禪の寺に　もと

まはりくれあるの山れ山人と人をこうかに山ゆゑをとう

みしまはあるしき山すなはしきのみくるつさは　なり

こはのくのあるはれすゆこつかひかは下志さへしりこしのひくは

家々稱證本々本古書入以善滅帯　今刻書々

巻第十　物名部

ひらし　ひらゆき

ち海人の文本ひらしあしいきは山の山ひこよひさ
　　よむ守ゆ

在郭五下空蟬上

勝臣

かゝりてもなにとうたまはれてもえんかうはいのかとなり
　　かゝ物と

かゝるこそいまは友則下

くれのおも　つゝゆき

こゝ時に急つとれはゆふ風はなりけれいとみしまちに

悉草　利貞下

かゝれの井　こやこし海

かゝれこゝも此

とゝ乃井て牙成屋くらゐ　ゆきは家こゝすへの
　　まれなりや

かゝめと　清行下

そめと乃　めはる

あやもち

こゝはめとはそめとのこそは風はく雲はあれとの山の
　　おもとり

このうゝ名のおゝ乃みとのそめとはしりあるへ

まはりてまうけり時りよめり

桂宮下

巻第十一

巻第十二

巻第十三

古今和歌集序　紀淑望

夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也人之在世不能無為思慮易遷哀樂相變感生於志詠形於言是以逸者其聲樂怨者其吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於和哥和歌有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春鶯之囀花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各發歌謠物皆有之自然之理也然而神世七代時質人淳情欲無分和哥未作遂于素戔烏尊到出雲國始有三十一字之詠今及歌之作也其後雖天神之孫海童之女莫不以和歌通情者爰及人代此風大興長

歌短哥旋頭混本之類雜躰非一源流漸
繁譬猶拂雲之樹生自寸苗之煙浮天
之波起於一滴之露至如難波津之什獻
天皇富緒川之篇報 太子或事関神
異或興入幽玄但見上古歌多存古質之
語未為耳目之翫徒為教誡之端古
天子每良辰美景詔侍臣預宴 筵者獻

和歌君臣之情由斯可見賢愚之性於
是相分所以隨民之欲擇士之才也自大津
天武天皇第三皇子
皇子之初作詩賦詞人才子慕風継塵移
彼漢家之字化我日域之俗民業一改和
歌漸衰然猶有先師柿本大夫者高振
神妙之思獨步古今之間有山邊赤人
者並和哥仙也其餘業和哥者綿々不絶

及彼時變流漏人貴奢淫浮詞雲興艷
流象漏其實皆落其花孤榮亦有好
色之家以此為花馬之使乞食之客以此
為活計之謀（媒イ）故半為婦人之右難進大夫（丈イ）之
前近代存古風者纔二三人然長短不同
論以可辨華山儒正却得歌躰然其詞花
而少實如圖畫好女徒動人情在原中將之

歌其情有餘其詞不足如萎花雖少彩
色而有薰香文琳巧詠物然其躰近俗
如賈人之恙鮮衣宇治山儒撰喜其詞花
麗而首尾停滯如望秋月遇曉雲小野
小町之哥古衣通姫之流也然艷而無氣
力如病婦之著花粉大友黑主之歌古
猿丸大夫之次也頗有逸興而躰甚鄙

如田夫之息花前也此外氏姓流聞者不
可勝數其大廛皆以艶為基不知歌之
趣者也俗人爭事榮利不用詠和歌悲
哉〻〻雖貴兼相將富餘金錢而骨未
腐於土中若先滅於世上適為後世被知
者唯和歌之人而已何者詣近人耳義慣
神明也昔平城天子詔侍臣令撰万葉集

自余以來時歷千代數過百年其後和歌
弃不被採雖風流如野掌相輕情如
在納言而皆以他才聞不以斯道顯
陛下御宇千今九載仁流秋津洲之外
惠茂筑波山之陰淵變為瀨之聲寂〻
閑口砂長為巖之頑洋〻滿耳思継既
絶之風欲興久廢之道爰詔大内記紀友則

御書所預紀貫之前甲斐少目凡河内
躬恒右衛門府生壬生忠岑等各獻
家集并古來舊歌曰續万葉集於
是重有詔部類所奉之歌勒為二十
卷名曰古今和歌集臣等詞少春花之
艶若竊秋夜之長況哉進恐時俗之嘲
退慙才藝之拙適遇和哥之中興
以樂吾道之再昌嗟乎人丸既沒和哥
不在斯哉于時延喜五年歲次乙丑四
月十五日臣貫之未謹序

此集家々所稱雖説々多且得師説又加了
見為備協学之證本不顧老眼之不堪手
自書之
近代僻案之好士以書生之失錯稱有識之
秘事可謂道之魔姓不可用之但如此用捨
只可随其身之所好不可存自他之差別志
同者可随之
貞應二年七月廿二日癸亥　仁部尚書藤
同廿八日令讀合訖書入落字了
傳于嫡孫可為將来之證本

和國風俗無過廿一字竝土教門悉歸十八道予出
九陌之塵入土尊之室既多年逢良純老師
傳四度之秘要其恩何以報之仍不顧老眼不
堪書此一集与之者也于時天文廿二臘廿四

稱名師野釋[illegible]